

# 幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告

## — 5 歳児での実践 (クリスマス) —

A Study of the Musical Ensemble at Childrens' Prayer Service

— A Case Study of 5 - year - olds ( Christmas 2006 ) —

吉 田 若 葉

本稿は、5歳児のクリスマスでの実践を通して、礼拝における賛美としての合奏に関して考察を行うものである。合奏は、「キリスト教保育120周年記念クリスマス」への参加のために計画された。北陸学院短期大学附属第一幼稚園・ウイン幼稚園・扇が丘幼稚園の5歳児70名の合同演奏である。合同練習が十分にできないという制約のもと、子どもの心情面を重視して行った。本稿では、筆者のこれまでの研究に基づく音楽的な表現活動の指導に関する基本的な考えを述べ、実践に関連させ考察に加えている。賛美歌の変奏曲を選曲し、合奏としてアレンジする迄の経過を記述後、賛美についての考察を行い、合奏のタイトルとした、「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌(作詞：井上良彦園長)が作詞されるに至った経緯について述べている。実践経過はエピソードとして記述して考察を加え、五つの質問に対する子どもの声から指導の効果を検証している。今回は、合奏への動機づけの要因として、賛美歌と絵本そして子ども自身が演じた降誕劇が効果的に働いた。礼拝における賛美としての合奏は、表現する子どもの内面を大切にして、効果的な動機づけと感情経験や聴覚経験としての扱いを重視することが有効であるとの考察を述べている。

### 1. はじめに

2006年は、キリスト教保育120周年にあたり、石川県キリスト教幼稚園連合会は、2006年12月22日(金)に、金沢市観光会館を会場として「キリスト教保育120周年記念クリスマス」(以降「120周年クリスマス」と記す)を開催した。金沢市近郊のキリスト教幼稚園12園の5歳児が参加し、さんびとメッセージ・降誕劇による福音・ハンドベルと合唱の三部構成で進められた。

北陸学院短期大学附属幼稚園も参加し、三園(第一幼稚園・ウイン幼稚園・扇が丘幼稚園)が合同で、最初の「さんびとメッセージ」の部の〈さんび〉で演奏した。園児のお祈りに続く賛美歌と合奏の後、牧師によるクリスマス・メッセージが語られた。合奏の指導は、吉田が担当した。楽器指導に関しては、これまでに本学紀要第15号『幼児期の音楽教育のあり方に関する一考察』<sup>1)</sup>から紀要第20号『保育における楽器指導—創造的な人間形成と音楽教育—』<sup>2)</sup>で述べてきた。礼拝の中での合奏は、当然、日常の保育における楽器あそびとは異なる展開となるものの、子ども

の主体性や感性、他の領域との関連も視野にいれ創造性の育ちを大切に考えていかなければならない。本稿では、5歳児のクリスマスでの実践を通して、幼児の礼拝における賛美としての合奏に関して述べていく。

## 2. 音楽的な表現活動における指導の要点

これまで、幼児期における音楽教育は創造的な人間形成の一環として行われるべきとの考えの基、保育現場での研究を続けてきた。それは、ジェームス・マーセル (James L. Mursell 1893-1963) の教育理念から学ぶところが多い。マーセルは、成長の原理を音楽教育に適用している。<sup>3)</sup> 子どもの人間的、音楽的成長という点に焦点を合わせているマーセルの考え方からは、保育においても有益な示唆が与えられ、保育内容の領域「表現」の視点からも決して逸脱するものではない。本項では、「音楽的な表現活動における指導の要点」として指導における基本的な考えを述べ、実践と考察に関連させていくこととする。

### ①できるだけ多様な、変化に富んだ音楽を教材とする。

子どもの個性により、教材の適、不適は一樣ではない。個々の子どもの興味や欲求に応じられるように、できるだけ多様な教材の準備が必要である。教材選択の基準は、勿論、音楽的成長にとって有効なものという点におくことが望ましい。今回の合奏は、クリスマスの礼拝における賛美に相応しい曲でなければならない。

### ②子どもが意欲的に関わられるような環境に配慮し、効果的な工夫をする。

子どもの自発的な欲求によって、意識的に行動ができ、その子らしい表現ができるように解放と共感を味わえる環境が重要である。そのために、子どもに「何を経験させたいか」指導のポイントを明確にもって、指導計画を作成する。また、視聴覚教材を用いる場合は、教材に頼るのではなく、音楽的に効果のある用い方を工夫する。

### ③単純な試みであっても、子どもの自主的な活動を尊重する。

人が創造的であるということは、自主的な行動によるものであり、音楽的な人も、自主的に音楽をする人ということがいえる。自主性の発達は、教育の最初から配慮されるべきである。好きな楽器を選ぶことや好みの意思表示をすることも、自主的な行動である。

### ④どのような小さな発見でも、認めて取り扱う。

発見は、直感的思考によるものであるが、子どもの発見を、保育者が認め、取りあげることで、子どもは、その発見の事柄を確実に認識することができる。模倣活動の中にも、子どもが発見できるような余地を残しておき、模倣活動を、単なる“もの真似”で終わらせないことが大切である。

### ⑤どんなに簡単な活動でも、感情経験・聴覚経験として、表情豊かに扱う。

音にたいする興味や愛着は、子どもの音楽的成長の第一要因である。幼児期の音楽的な表現は、別個の音楽要素として取り扱うのではなく、表現するための感情経験として認識させることが有効である。何よりも大切なことは、よい音による経験がなされることである。幼児期は、聴覚が発達する時期なので、音楽的知覚や想像力、感性の育ちの面からもできるだけ多くの表現要素を経験することが肝要である。

⑥技術的な問題は、音楽的に反応することから、筋肉のコントロールがなされるように導く。

技術は、音楽的な表現において重要なものであるが、機械的な訓練ではなく、⑤との関連でイメージを大切に扱って、行動パターンを関連させていくようにする。

⑦押しつけでなく、励ます、協力する、刺激を与える、観察する、興味を呼び起すなど創造的なアプローチによって、子どもと保育者で創りあげていくという姿勢を共有することを大切に

にする。  
子どもの活動は、気分的な状態からスタートすることが多いので、子どもの反応を捉えて臨機応変に対応しなければならない。

⑧比較学習や話し合いを効果的に用いる。

比較学習や話し合いは、意識的な行動がなくては不可能なことである。③④⑤⑥⑦との繋がりにおいて比較学習や話し合いを効果的に用いることができる。

⑨総合—分析—総合の過程で活動を進める。

これは、マーセルの主張する学習法であるが、まず、全体を感じ取らせ、興味や意欲をもたせてから、細部の分析を試み、その過程の中で、総合的なイメージが徐々に明確になって行くように援助していく。曲全体を捉えるときや、各フレーズの把握、奏法の習得にも用いることができる。

⑩個人差に対する配慮をする。

個人・小グループ・集団と多様に展開される活動の中で、個々の子どもの表現が活かされるよう配慮する。一人ひとりが充実感や達成感を味わえるように、集団と個のバランスへの配慮が必要である。個人差のある個々の反応を捉えながら集団としての表現の発達へと導く。

### 3. 合奏曲の選曲

合奏をするには、先ず曲の選曲から始まる。創造的で音楽的な活動を展開していけるような曲の選曲について考えてみたい。

#### 3. (1) 選曲にあたっての条件

選曲にあたっては、演奏する場所、演奏する園児の人数、どんな感じの曲にするか等の条件により曲が絞られてくる。今回の合奏は下記のように行った。

##### 3. (1) 1) 演奏する場所

「120周年クリスマス」会場の金沢市観光会館は、客席約1900席で舞台もかなり広い。舞台幅は約12m、上手下手に花道もある。天井と両サイドに反響板は設置されるが、楽器の数と配置、マイクの位置をよく考えなければならない。

また、附属各幼稚園のクリスマス会にも演奏することにした。三園それぞれに場所や人数の制約があり、三通りの演奏形態で行うが、全園児が揃うのは扇が丘幼稚園のクリスマスだけである。

### 3. (1) 2) 演奏する人数

演奏は、第一幼稚園26名・ウイン幼稚園8名・扇が丘幼稚園36名の計70名の5歳児が行う。三園合同の機会を何度も設定できないので、それぞれの園だけでも十分に楽しめる構成が必要となるが、人数の関係で、第一・ウイン幼稚園と扇が丘幼稚園の2グループで考えていくことにした。したがって、34名と36名でも演奏可能な70名編成の合奏の構成をしなければならない。

### 3. (1) 3) どんな感じの曲にするか

今回は、クリスマス礼拝での賛美としての合奏なので、厳粛で落ち着いた雰囲気があり、かつ喜びや希望が表現されている曲がよいと考えた。

演奏する曲は、何よりも子どもたちが演奏したくなるような曲でなければならない。そのためには、①口ずさめる旋律やリズムがある ②把握しやすいフレーズ(特徴ある旋律やリズムのまとまり)で構成されている ③伴奏として安定感のある曲がよい。

### 3. (2) オルガン曲「クリスマス古謡」と「来たりたまえわれらの主よ」

3. (1) の選曲にあたっての条件を考慮した結果、セザール・フランク (César Franck, 1822-1890) 作曲のオルガン曲「クリスマス古謡」<sup>4)</sup> を選曲した。

楽譜 (A4 縦) は、以前 (1988 年) 使用したことのある中から選んだが、1999 年から、同じ曲が、「来たりたまえわれらの主よ」(A4 横) として『讚美歌 21 による礼拝用オルガン曲集第 4 巻』<sup>5)</sup> に収録されている。『讚美歌 21 による礼拝用オルガン曲集』には、『讚美歌 21』に収められている賛美歌の旋律を主題とするオルガン曲が収録してある。この曲は、スイス民謡の旋律で古くから賛美歌として歌われていた曲である。日本語訳は、『讚美歌第二編』の 112<sup>6)</sup>、『讚美歌 21』の 241<sup>7)</sup>、そして『改訂版こどもさんびか』の 64<sup>8)</sup> に収めてある。

SWISS NOEL という曲名の旋律は、スイスのフランス国境近くの地域で 16 世紀から歌われていた。『讚美歌 21 略解』には、「フランス語でクリスマスを意味するノエル Noël は、中世に起源をもち、キリストの誕生を祝って歌われる歌です。(中略) 17,18 世紀には、このノエルの旋律を用いたオルガンのための変奏曲が多く作曲されました。」<sup>9)</sup> とある。変奏曲の解説によると、18 世紀のダカンによる変奏曲がよく知られているが、「フランクはこの素朴な民謡を、実に堂々とした音の厚い曲に変えました。」<sup>10)</sup> とある。

以上により、今回の選曲が、クリスマスの礼拝における賛美の曲として適切であったといえる。

## 4. 合奏のためのアレンジ

曲が決定したら、次に合奏のアレンジを考えていく。アレンジをする時は、先ず、子どもが曲をどのように感じるかを予想することと、保育者が子どもにどう感じてほしいのかを考えていく。これは、ただ子どもがのたように任せたり、保育者の思いを押しつけた指導にならないために必要な作業だと考えている。創造的なアプローチで子どもの表現を引き出すには、保育者自

身が試行錯誤を重ねて教材研究を行い、余裕をもって子どもの反応に対応することが重要だと考える。

#### 4. (1) おおまかに曲を把握する

保育者は、子どもが、曲をどのように感じるのかを、直感的に予想しているかもしれない。しかし、勘だけでなく、曲の表情・拍子・旋律・リズム・構成・伴奏等から教材を分析して把握することが大切である。今回選曲した「クリスマス古謡」は、堂々としたなかにも、弾んだリズムのメロディーが印象的な曲である。賛美歌の旋律が16分音符の弾んだリズムで表現されている。途中で、やさしい表情の部分8小節が旋律に挟まれており、最後の6小節も静かに終わる。

#### 4. (2) 楽器の編成

曲をおおまかに把握した後は、楽器の編成作業に入る。園にある楽器を全部並べ、保育者全員で、子どもたちの気持ちになって演奏しながら考えていく。合奏では、曲を音楽的に演奏することも大切だが、個々の表現が活かされる演奏を優先したいと考えている。そのためには、子どもたちがトライしたくなるような楽器編成でなければならない。対象の5歳児に対しては、①興味をもって取り組める有音程の楽器を用いて部分奏をいれる。②演奏する楽器の存在感を意識して演奏できるよう奏法を工夫する。③美しい音色や、音の調和を感じて演奏できるように編成する。の3点を配慮し楽器を絞り込んでいった。

具体的には、①フレーズを捉えて音楽の流れを把握する。②メロディーやリズムから、各フレーズの表情を感じて楽器を決める。③全体のバランスを考えて楽器の数を決定する。の順で整理していく。フレーズの表情によって、いろいろな表現を試してみて、音色と奏法と数を決定していく。

楽器の編成については、子どもの反応を捉えながら、合奏を創る過程においても、考え工夫を重ねていく。創造的であることは、修正を重ねながら積み上げて行くものだと考えている。

今回使用する楽器は、トーンチャイム8音・グロッケン2台・キーボード2台・シンバル1枚・フィンガーシンバル15組・ボンゴ2個・スズ&ミニマラカス10組・スレイベル12個・トライアングル4個(スタンド2台)で10種類70名分である。

配慮②の演奏する楽器の存在感を意識させるためには、集中力の持続を必要とするような奏法の変化や、際立つ奏法で存在感を感じさせる等の工夫をする。今回は、フィンガーシンバルのリズムに変化をつける。スズ&ミニマラカスは一人が両手で持つ。スレイベルは、フレーズの区切りを受け持つ。トライアングルは、パーカッションスタンドに2個吊るして両手で打つ。かつフィンガーシンバルとの交互奏。ボンゴとシンバルは、ベースとしてリズムを支えるが、ボンゴは半拍打ちでシンバルは2拍打ちである。グロッケンは旋律の部分奏を、キーボード(オルガンの音色)は低音部奏を担当する。

#### 4. (3) 楽器の配置

子どもたちは、楽譜ではなく聴覚を頼りに演奏しているので、楽器の配置はとても重要である。先ず、音楽の流れを感じながらみんなの音を聴き合って演奏できるような配置でなければなら

い。子ども同士が互いの呼吸を感じ合って、音楽の波に乗れるような位置関係がよい。演奏しながらのコミュニケーションが可能になって、楽しくなる。具体的には、同じパートを受け持つ・交互に奏する・アクセント・フレーズの区切り・ベースで全体を支える等の役割の楽器を、音楽の流れの中で図式化していく。実際に演奏しながらも整えていくが、アレンジの時点で大体は決めておく。

「120周年クリスマス」の配置は下記のようなものである。○中の数字は人数である。

スズ&マラカス⑤	ボンゴ①・トライアングル①・シンバル①・トライアングル①・ボンゴ①	スズ&マラカス⑤
グロッケン②	トーンチャイム	トーンチャイム
フィンガーシンバル⑤	D <sup>5</sup> 音④・D <sup>6</sup> 音④	A <sup>5</sup> 音④・A <sup>6</sup> 音④
	B <sup>b5</sup> &G <sup>5</sup> 音④・B <sup>b6</sup> &G <sup>6</sup> 音④	スレイベル⑫

#### 4. (4) 曲のテンポ

合奏を創りあげていく上で最も大切なことは、保育者も子ども同士も互いに呼吸を感じ取って、表現することである。したがって、理想的なテンポとは、子どもたちの心も表現も一体となれる音楽の流れであると考えている。

テンポについて、『讃美歌21』でも、「讃美歌のテンポは、礼拝の形式、教会の人数や集会の種類、教会の音響条件などによって変わってきます。目安としてメトロノーム（速度表示）をつけましたが、これに縛られず、それぞれの状況に応じてテンポを決めてください。」<sup>11)</sup>と記述してある。

### 5. 合奏「おいでなさい イエスさまよ」への導入

#### 5. (1) 賛美としての合奏

合奏への動機づけは、活動を充実させ、子どもたちの音楽的成長に影響を及ぼすという点で重要である。子どもたちが積極的に楽器の演奏に取り組む動機づけの要因としては、①楽器への興味・関心（楽器の音・楽器の奏法）②演奏する曲への関心 ③友達と演奏する楽しみ等が挙げられる。この3点に加え、今回の礼拝における賛美としての演奏という観点からすると、賛美ということが重要なポイントとなる。1966年の『こどもさんびか』改訂のために出版された『こどもさんびか歌い方教え方』<sup>12)</sup>に、賛美歌は「神への賛美を音楽を手段として行う」と書かれているが、賛美歌同様、礼拝での合奏においても留意すべきことである。

キリスト教保育の環境にいる子どもたちは、多分どこの園でも、「きれいな声で賛美歌を歌う」といわれる。賛美歌は、みんなで一緒に繰り返して歌う機会が多いことと、心をこめて歌うことができるからであろう。それは、何ととっても、純粋な子どもたちが素直な心で神さまイエスさまを信じているからである。そこで、賛美としての視点で合奏を考えた時に、子どもの心にすつと入ってくる賛美歌が合奏への動機づけとして有効ではないかと考えた。

18年前は、『讃美歌第二編』112の歌詞が子どもには難しく、あえて賛美歌と結び付けて考えなかった。『讃美歌21』と『改訂版こどもさんびか』では、「原歌詞を基にアドヴェントに合うようにやさしく翻案した歌詞に改訂して」<sup>13)</sup>収録されているが、やはり幼児にとって歌詞の意味を理解するには難しい言葉が多すぎる。もっとすんなり、子どもの心にはいる言葉の賛美歌で合奏に繋がりたいと考えた。

ここでもう少し深めて、北村宗次の『教会の音楽』から、神学的に賛美について考えてみたい。

「神の言は人間の魂に語りかけられる時に、詩を、歌を、音楽を起こさせるのである。ボンヘッファーは、かつて復活節のカンターテ（「歌え」という主題）の主日の説教の中で次のように語っている。「一つのたとえを取り上げて見ましょう。人間の魂は一つの立琴であり、この魂に当たる神の言葉は立琴奏者です。そして立琴の弦が純粹であり、調子の狂いが少なければ少ないほど、魂からほとぼり出て立琴奏者の讚美に至る歌は、より純粹な、そしてより明澄なしらべとなってひびくのであります」（『教会の本質』森野訳一69ページ）。」<sup>14)</sup>

「ところで、さんびにおける追体験としての演奏は、楽譜の機械的な反復ではない。それは、会衆の歌唱の一人として加わることであっても、その伴奏者としての楽器の演奏であっても、あるいは、声や楽器による独唱、独奏であっても、その演奏者の生き方がかかっている。その演奏にかかわる関わり方が問われている、といってもよいであろう。」<sup>15)</sup>

「偉大な教父アウグスティヌスが、讚美歌の定義をして「神を・讚美する・歌」としたことはよく知られている。この「神」と「讚美」と「歌」の三つの要素のうち一つも欠けることなく、結びついているのが讚美歌であるとは、古典的な定義であるが、基本的に重要なことである。そして、「讚美」という、われわれの用いる表現が、「美を讚える」（たたえる）といった意味をもつことは当然であろう。しかし、その「美」の根源は、神につけるものなのである。」<sup>16)</sup>

「人間の現実のただ中に、神が救いのわざをなし、実現し、成就されようとするところに、讚美はわき、その美しさが与えられるのである。そのために、神ご自身が貧しくなられ、「幼な子が布にくるまって飼葉おけの中に寝かしてあるのを見るであろう。それが、あなたがたに与えられたしるしである」というかたちで、救い主が降誕されるところに、「いと高きところでは、神に栄光があるように、地の上では、み心にかなう人々に平和があるように」と、見事に美しい讚美がうたわれるのである。また、「羊飼たちは、見聞きしたことが何もかも自分たちに語られたとおりであったので、神をあがめ、またさんびしながら帰って行った」  
「ルカ2・12-20」のである。」<sup>17)</sup>

以上、賛美について、キリスト教保育に携わる保育者にとって学ぶべきと思われる箇所を挙げたが、丁度クリスマスの賛美の箇所へと至った。クリスマスの時、子どもたちは、キリストの降誕劇を自ら演じていることで、すばらしい賛美の体験をしていたのである。

## 5. (2) 賛美歌「おいでなさい イエスさまよ」

5. (1) でも述べたが、賛美としての視点で合奏を考えた時に、子どもの心にすっと入ってくる賛美歌が必要となった。救い主を待ち望む気持ちを、心をこめて歌える賛美歌でなければならない。「来たりたまえわれらの主よ」の変奏曲を演奏しながら、心の中で賛美歌の言葉を歌ったり、賛美歌の情景をイメージすることができれば、表情豊かな演奏（賛美）ができるだろうと考えた。

そこで、賛美歌「来たりたまえわれらの主よ」の旋律への作詞を、附属幼稚園の井上良彦園長（北陸学院長・同短大宗教主事）に依頼したところ、下記のような「おいでなさい イエスさまよ」というタイトルの賛美歌が作られた。

吉 田 若 葉

「おいでなさい イエスさまよ」

- |  |  |
|--|--|
| 1. おいでなさい 神のお子さま<br>よろこびいのって 待っています<br>ひかりのみ子が 来られたら<br>この世のくらすも かなしみも<br>ひかりにかがやき かわるでしょう | 2. そらのほしも つめたいかぜも<br>羊の群れも 人びとも<br>天使のうたごえ 聞きました<br>天には栄光 地に平和<br>神の子 イエスさま おいでなさい |
|--|--|

楽譜-1 おいでなさいイエスさまよ

詞：井上 良彦  
曲：スイス民謡

1. おいでな さい かみの おこさま よろこび いのって まっています  
2. そらのほ し も つめたい かぜ も ひつじの むれもひ と びと も

9  
ひ かり の み こ が こ ら れ た ら た このよの くらすも  
て ん し の う た ご え き き ま し た て ん に は え い こ う

15  
かな し み も ひ か り に か が や き か わ る で な し ょ う  
ち に へ い か み の こ イ エ ス さ ま お い で な さ い

21  
お い で な さい かみの おこさま よろこび いのって まっています  
そらのほ しも つめたい かぜも ひつじの むれもひ と びと も

賛美歌の歌詞割りを、楽譜-1のように決定したが、割りつけ方によっては、言葉が素通りしてしまうことがある。子どもたちが言葉を大切に歌えるよう、旋律と言葉のリズムとイントネーションの一致に苦心した。

賛美歌と合奏のつながりは、間を空けずに1小節半の前奏を加えて合奏へ繋げることとし、合奏のタイトルを「きたりたまえわれらの主よ」に倣い、「おいでなさい イエスさまよ」と決定した。そして、賛美歌の伴奏は、『改訂版こどもさんびか』（飯靖子編曲）を使用することとした。

5. (3) 絵本『ほんとうのクリスマス』

「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌が作詞された時と同じ頃に、『ほんとうのクリスマス』（森一弘/文 太田大八/絵）<sup>18)</sup>という絵本が出版された。この本は、これまでのキリストの降誕の物語絵本とは異なり、民が待ち望んだ主のご降誕という視点を強調して描かれている。当時のユダヤの悲惨な状況と、救いを求めて祈る人々、そしてマリアとヨセフの二人も救いを求めて祈っており、3場面がそれぞれ見開きで印象的に描いてある。終わりの3場面では、やさしさに輝いている飼葉桶のイエスさまと、喜んで神を賛美している人々や動物が描かれている。文を書いた森は「救い主キリストの誕生は、そんなに安易で甘いものではありませんでした。それは、



幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告

暴力に満ちたこの世界の恐ろしい現実のなかで苦しみ、必死になって、叫びをあげ続けた人びとに対する神の究極の答えでした。そのような視点からこのクリスマスの物語をまとめました。」<sup>19)</sup>と述べている。同じ視点の賛美歌と絵本を得て、合奏への準備が整った。

「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌は、降誕劇の中でも歌うので、子どもたちに賛美歌を紹介するのは各附属幼稚園の保育者に任せ、吉田は実際に楽器を使う段階から関わることとした。絵本は、各園に備えたが、教材としてどのように用いるかの話し合いはもたず、アプローチの方法は各保育者に任せた。

楽譜 - 2 おいでなさいイエスさまよ セザール・フランク

The score consists of three systems of music. Each system includes a grand staff (Piano) and a guitar staff. The guitar staff includes chord diagrams and melodic lines. The piano part is divided into three systems, each with a grand staff and a guitar staff. The guitar part includes chord diagrams and melodic lines. The score includes dynamic markings like 'p' and 'mp'.

System 1 (Measures 1-6):  
 Piano: *p* (measures 1-4), *mp* (measures 5-6)  
 Guitar: Chords D5, A5, B♭5, A5, D5, D5, D5, D5, D5, D6, B5

System 2 (Measures 7-11):  
 Piano: *p* (measures 7-11)  
 Guitar: Chords A6, B♭6, A6, D6, D6, D6, D6, D6, D6, B5

System 3 (Measures 12-16):  
 Piano: *p* (measures 12-16)  
 Guitar: Chords D6, D6, D6, D6, D6, D6, D6, D6, D6, B5

Additional markings in System 3:  
 Guitar: メロディー (メロディ) (Melody) (メロディ) (Melody) (メロディ) (Melody) (メロディ) (Melody)

吉 田 若 葉

18 Pno. *mf* *f*

23 Pno. *ff*

28 Pno. *p*

トーンチャイム  
フィンガーシンバル  
トライアングル  
グロウカン  
キーボード  
スズ  
ミニマラカス  
スレイベル  
ボンゴ  
シンバル

D6 D5 A6 A5 B♭6 B♭5 A6 A5 D6 D5 D6 D5  
B♭ (キーボード) F G D B♭ G A  
A6 G6 A6 G6 A6 G6 A6 D5 D6

-2-

## 6. 実践

実践経過は、担当保育者の記録を基にエピソード（紙面の関係で簡略にして記述）とし、本稿2、「音楽的表現活動における指導の要点」（以降「要点」と記す）と関連させて考察を加えることとする。

### 6. (1) エピソード

#### エピソード1：賛美歌「おいでなさい イエスさまよ」を歌う・降誕劇の準備

絵本『ほんとうのクリスマス』を読んで、「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌を聴かせる。しばらくシーンと静かな沈黙があり、「なんか暗い歌やね…」「けっこう長い歌だ…」の声。戦争を話題にすると、「爆弾で死んだとこ見たことある」「本にも死んだとこでてきた」の気づきで再度絵本を見る。「子どもが倒れてる」「武器もっている。これで殺された」と絵を見て話す。今も同じ事が起こっていると話すと、みんな暗くなる。賛美歌は、すぐに言葉を憶えた子が多く、特に「おいでなさい」「まっています」の言葉とリズムへの反応がよい。

ユダヤの国の人々はどんなお祈りをしていたと思うかの問いかけに、「神様食べ物も取られてしまった」「神様お家も壊されてしまった」「神様大事な家族も殺されてしまった。もう嫌です。ちゃんと過ごせるように助けてください。」などの祈りの言葉が出た。この祈りは、子どもたちの意見で降誕劇の最初の場面に取り上げた。

(考察) 絵本と賛美歌による導入で、子どもたちは、主のご降誕を待ち望む気持ちになっていることが読み取れる。保育者の、子どもに対する意識づけへの効果が見られる。

#### エピソード2：合奏初日・賛美歌と指揮

最初に「おいでなさいイエスさまよ」の賛美歌を歌ってから、合奏曲をピアノ演奏で聴く。「さっき歌ったのと一緒にいたいところあった」と気づく子がいる。再び聴いた時には、じっと耳を傾ける子が増え口ずさむ子もいる。「おいでなさいと一緒にだった」「一寸違うところもあった」「似てた」との声があがる。賛美歌をもとに作曲した曲であることと、この曲を附属幼稚園年長組のみんなでクリスマスに演奏することを話すと、どの子も瞳を輝かせ意欲的な表情になる。楽器は、子どもたちが憧れるトーンチャイムから始める。

まず、保育者の演奏を真似て、子どもたちも挑戦してみる。D音A音B<sup>b</sup>音を3名で持ち、一人でオクターブ(D<sup>5</sup>D<sup>6</sup>等)の2音を持つ。「先生の目をよく見てね」と声をかけ、保育者の指揮で演奏する。「すごいね!」の拍手も励みになって「ドキドキする」と自分の番を楽しみに待つ子が多い。1-10小節までのトーンチャイムの、奏法・出だし・1本から2本への変化・音の流れ、等を楽しみながらいつの間にかできるようになっていった。

D<sup>5</sup>とD<sup>6</sup>のような音の高低については、何度も弾いて聴かせると、「同じ音だ」「同じけど違う…」「音の高さが違う」「長い方が低い」と気づいていく。トーンチャイムの響きに耳を傾けると「ながーい!」と驚いていた。

(考察) 「おいでなさいイエスさまよ」の賛美歌からスタートし合奏への目的意識をもつように導いた。このエピソードには、「要点」の②③④⑤⑦⑧⑨が見られるが、三園合同という制約のある今回の合奏は、指揮による展開が中心となった。指揮は、演奏のタイミングを感じさせることに加え「うまくできたよ」「気をつけて」など目で子どもに語りかけてコミュニケーションが取れる。子どもが保育者の目を見ることで、タイミングを体得し、集中力や持続力もついてくる。指揮は、子どもに対する指示ではなく、子どもたちが音楽の波に乗れるよう誘導するという気持ちで行う。総合→分析→総合の過程を重視し、最初は音楽の流れを大切にして、少々リズムや音が違っていても気にせず、創造的なアプローチや意識づけによって

進めると、次第に子ども自身の気付きで調整されてくる。

### エピソード3：室内あそび（楽器コーナー）で楽器に親しむ・音探し

11月末から、朝の室内あそびに楽器コーナーを設け「おいでなさいイエスさまよ」のテープを流しておいた。一人で幾つもの楽器を演奏する子や、友達に教えてあげる子、指揮をする子などがある。他のコーナーで遊んでいる子も口ずさんだり鼻歌を歌って楽しむようになった。グロッケンとキーボードのパートは、保育者が興味をもちそうな子を誘い、音探しをした。有音程の楽器は、興味をもって楽しそうに挑戦する子は多いが、正確に演奏できる子は少ない。（保育中合奏として活動した回数は、各園9回で、内吉田が関わったのは5回、内全員揃ったのは1回であった。）

（考察）このエピソードでは、「要点」②③④⑦⑨⑩の展開が見られる。グロッケンとキーボードのパートは、音探しとして遊び感覚で挑戦する様子から、正確な音とリズムで表現する子を確認していく。音探しは発見の喜びを体験し、認められることで自信へとつながっていく。約2週間、室内遊びでの環境が設定されていたので、演奏したい子どもは何度も繰り返し楽しむことができた。また、十分に把握できていないパートも子どもたちで教え合い互いに刺激し合って、挑戦意欲や協調性を養いながら曲に親しんでいった。

### エピソード4：交代で繰り返し演奏する

楽器のパートが決定するまでは、みんながどの楽器も演奏できるように交代して繰り返し楽しむ。合奏の隊形で交代する他、サークルに楽器を並べて置いて、子どもが順番に回って弾く方法でも行った。両手で持つスズ&マラカスはとても人気があった。フィンガーシンバルもリズムに変化があるので手ごたえを感じていたようだ。

（考察）みんなで楽器を交代して演奏する活動は、どのパートも演奏できるので曲全体を把握するのに有効である。また、繰り返すことは、緊張からの解放と共感をもたらす、自信も得ることができる。何よりも、交代自体を楽しんでいることが、この活動を活発にしている。このエピソードでは、「要点」②③が見られた。

### エピソード5：目を閉じて聴く

「目で見るとは耳で聴きましょう。自分の音や他の人の音を聴いてやってみましょう。」と言葉掛けをしたところ、F子が「目を閉じてやってみたよ。耳だけで」と言ってきた。「みんなもやってみよう」と目を閉じて演奏してみる。「できた！」「耳でよく聴こえた！」「きれいな音だった」「ドキドキした」「トーンチャイムの音スーって入ってきた」「嬉しくなった」などの感想を述べ、その後は、みんなの音が合うようになってきた。

（考察）F子が偶然した行動が思わぬ成果をもたらした。このエピソードでは、「要点」の②③④⑤⑧⑩が見られる。エピソード2の指揮に集中することから、音楽で最も重要な聴覚の意識づけへとレベルアップして、聴き合うコツも少し掴んだようだ。これに加え聴き合って揃えるということに関して、「みんなの心がツーンと繋がっています」と子どもたちの胸を繋ぐ仕草をするのも意外と子どもたちがその気になり効果のある方法である。楽器配置の影

響も大きい。

#### エピソード6：イメージによる反応

最初の頃、フィンガーシンバルをうまく打ち合わせられない子に対して「一つの手はそのまま、もう一つの手をエレベーターにします」と助言するとできるようになった。また、打ち方が乱暴で音色が揃わなかった時には、「冷たい風（賛美歌2番の歌詞）が吹くように」の声掛けで、響きが変化し、「冷たい風、冷たい風」と言いながら鳴らす子もいた。トーンチャイムの響きをよく聴いて演奏する時は、「響きを聴いて耳からスーってお腹まで入れましょう」と言うイメージができて響きをよく聴くようになる。フレーズの変り目に奏するスレイベルには、「スレイベルは指揮者よ。きれいに響かせて知らせてね」とお願いをすると、俄然、揃って美しい音が響いてきた。

（考察）このエピソードは、まさに「要点」⑤⑥の展開である。

#### エピソード7：反応を捉えた柔軟な対応

「おいでなさいイエスさまよ」の曲は2/4拍子なので、2拍の波に乗るように指揮をする。子どもたちは、賛美歌でも親しんでいる旋律が心地よさそうである。トーンチャイムは勿論、スズとマラカス・フィンガーシンバルとトライアングルの交互奏も快調である。時々、1拍ずれて奏する子もいるが、違和感はない。グロッケンやキーボードの部分奏は誇らしげである。スレイベルは指揮としての責任をもって響かせている。お気に入りの楽器なのに演奏に苦戦したのが、ボンゴとシンバルである。曲に合う音色のボンゴは意外に重く一定のリズム打ち（♪♪）が難しい。シンバルは、2拍のリズム打ちがすぐに1拍打ちになってしまう。ボンゴは、スタンドに取り付けてマレットで打ち馴れてから脇に抱え手で打った。シンバルは拍打ちで、手の平との交互奏にして、2拍で響くようにした。

（考察）楽器は、基本的に1拍（♪）のリズムで進行するので、演奏自体は波に乗りやすい。1拍ずれる時もあるが、音色の調和は保たれるので波に乗って演奏することを優先して進めていく。曲全体のバランスを考えて、幾つかの楽器のリズムに変化をつけてスパイス的に用いた。グロッケンは旋律の部分奏、キーボードは低音部の部分奏で担当した。ボンゴとシンバルは、楽器の人気はあったが演奏が難しかったようだ。どうしても曲を支えて盛り上げる役割として必要な場合は、子どものリズムを乱さないような工夫が大切である。このエピソードには、「要点」②⑦⑨⑩が見られる。

### 6. (2) 子どもたちの声

「120周年記念クリスマス」当日は、午前10時からのリハーサル後、午後1時開場までの間、子どもたちはウイン幼稚園で過ごした。その間、子どもたちの気持ちをまとめる意図もあって、「おいでなさい イエスさまよ」について話し合いの時をもった。下記の表が質問の内容と子どもたちの声である。

吉 田 若 葉

質問1. 「おいでなさいイエスさまよ」の楽器を演奏している時、感じたり、考えたり、思い出したりしたことはありますか。

( )は人数

第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・明日はどんな日になるかな ・今日は楽しい日だな ・みんなのこと信じてる</li> <li>・みんなの気を合わせてる ・みんなの力で合わせてやりたい</li> <li>・みんなの心一つにしたいな ・ページェントのこと思い出した</li> </ul>
ウイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・はじめてする時難しそうだった ・はじめてする時は緊張した</li> <li>・とても静かになった時ドキドキした</li> <li>・沢山のお友達と一生懸命、楽器合わせたのが嬉しかった</li> <li>・みんなの楽器上手だなあと思った</li> <li>・賛美歌「おいでなさいイエスさまよ」と同じだと思った</li> </ul>
扇が丘	<ul style="list-style-type: none"> <li>・演奏する時ドキドキした(2)</li> <li>・どこで鳴らすか考えていたので、楽器した後に、すっきりさっぱりした</li> <li>・頑張ってると思った(2) ・やれるかもって思った。</li> <li>・できるできると思って楽しかった ・みんなと一緒に合奏できて嬉しかった(3)</li> <li>・一回やった後にもう一回やりたいと思った</li> <li>・歌もうたったし楽器もしたし楽しかった(6) ・舞台上でやった時嬉しかった</li> <li>・目をつぶってやったからできた ・目をつむった時ドキドキした</li> <li>・目をつむった時やらなきゃと思った ・空にいるみたいだった</li> </ul>

質問2. 「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌について、お話してください。

第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・途中で声が高くなる場所お腹いたくなる</li> <li>・歌っていると長いことばが小さくなっていく ・長くって難しい</li> <li>・同じ言葉まちがえそう ・聖書の言葉を話したくなる ・いろいろな言葉が出てくる(2)</li> <li>・「まっています」の言葉のところがおもしろい ・楽しいなって思う</li> <li>・おもしろい歌だな ・心一つにして歌いたい</li> </ul>
ウイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ちょっと難しいなあと感じた(4) ・すごいきれいな賛美歌だと思った(7)</li> <li>・イエス様が生まれるお歌はすてきななあと思った(2)</li> <li>・神様のおことばが入ってるなあと思った</li> </ul>
扇が丘	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「空の星も」を歌った時先生の口を見て覚えた</li> <li>・今日やってた時「今だ」って思ってドキドキした ・歌ったらあくびが出た</li> <li>・みんなと歌ったから嬉しかった ・楽しかった(2) ・嬉しかった</li> <li>・「おいでなさいイエスさまよ」歌っているとなんかあつくなる(3)</li> <li>・本当に天使が出てきて歌うみたいだった ・2題目(2番)歌ったら心の中嬉しくなった</li> <li>・「空の星も」を歌った時空にいるみたいだった</li> <li>・「冷たい風も」のところで本当に寒くなった(2)</li> <li>・羊飼いとかが羊たち寒かっただろうなあと思った</li> <li>・羊になりたくなかった(2番の歌詞がページェントと一緒にだと驚いていた子)</li> <li>・イエス様もう一回生まれてきてほしいって思った</li> </ul>

質問3. どんな気持ちで「おいでなさい イエスさまよ」を演奏しましたか。

第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嬉しい気持ち(6) ・楽しい気持ち(3) ・みんなで楽器していると楽しい</li> <li>・ありがとうって気持ちになる</li> </ul>
ウイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・まちがえないようにって思った ・まちがえないように頑張ってる</li> <li>・トーンチャイムする時、ドキドキしたけど、だんだんできるようになって嬉しかった</li> <li>・覚えてきたらトーンチャイムできて嬉しい気持ちだった ・自分はすごいなあと思った</li> </ul>

幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告

扇が丘	<ul style="list-style-type: none"> <li>・嬉しい気持ち (14) ・楽しい気持ち (11) ・やれると思った (2)</li> <li>・みんながやれば大丈夫 ・みんなで頑張る</li> <li>・イエスさまが生まれたことってすごく嬉しかった</li> <li>・イエスさまがもう一回生まれてほしい</li> </ul>
-----	---

質問4. 第一幼稚園・ウイン幼稚園・扇が丘幼稚園のお友達と一緒に演奏してどうでしたか。

第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌ったりして楽しかった ・みんな演奏して楽しかった ・楽器が楽しい</li> <li>・楽器をいろいろ変えて楽しい ・第一だけだったら少ない一緒だったら多くて楽しい</li> <li>・扇が丘とした時、同じ楽器もあったけど違う楽器もみてすごいって思った</li> <li>・人数が多いからよく聞こえる ・音がきれいだった</li> <li>・ウインと扇ができていて自分もがんばろうと思った</li> </ul>
ウイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼稚園で練習した時よりも、沢山のお友達になって音が大きくなって嬉しかった</li> <li>・沢山のお友達になった時、トーンチャイムならないかなと思ったけど鳴って嬉しかった</li> <li>・みんなで作った方が音が大きいと思った</li> <li>・8人でした時よりもみんなでした時の方がきれいな音になった</li> <li>・楽器した時、この力は全部神様がくださってるんだと思った</li> </ul>
扇が丘	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なんか緊張した ・ちょっとドキドキした (2)</li> <li>・扇だけの時はちょっと楽しかった、みんなの時はいっぱい楽しかった</li> <li>・いっぱい楽しかった ・嬉しかった</li> <li>・ちょっとまちがえた時「あっ」ていたら友達になれた</li> </ul>

質問5. 心を合わせて演奏できるようになるまでのことを、お話してください。

第一	<ul style="list-style-type: none"> <li>・心を一つに合わせてする前は揃っていなかった ・音の大きさやリズムでよくなってきた</li> <li>・いっぱい楽器をしたくなかったから心が揃った</li> <li>・お家でトーンチャイムを紙で作ってしたから心が揃った</li> <li>・若葉先生にツーンってなるように聞いた</li> <li>・(嬉しい気持ちは) 笑顔でしなさいって言われて</li> <li>・若葉先生に「馬小屋は喜びに満ち溢れていない」って言われてから、みんな心を合わせた(降誕劇で)</li> <li>・みんなの心でいっぱいいたら心で合わせられる ・ねている間に心が揃った</li> </ul>
ウイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いっぱいお友達と練習したから (3) ・みんな頑張ろうって思ったから</li> <li>・神様から力をいただいているから</li> </ul>
扇が丘	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんながいるから出来ると思った (27) ・みんな頑張ろうって思った</li> <li>・みんなも頑張ろうって思った ・みんな一緒にすれば絶対にできると思った</li> </ul>

(考察)〈質問1〉は、リハーサル直後なので、子どもたちの初めての舞台経験の緊張感と演奏への意欲が伝わってくる。〈質問2〉より、言葉が難しいと感じている子もいたようだが、どの子どもも歌詞を意識して心を込めて賛美していたことが確認できた。〈質問3〉では、嬉しい気持ちで演奏した子どもが多かった。日頃、子どもは楽しいという表現をよく使うが、クリスマスの意味を感じてだろうか、「嬉しい」という言葉で表現している。

〈質問4〉では、大勢で演奏する緊張と楽しさに加え、「音が大きくなった」「きれいな音」など、音楽的な表現効果を感じている子も多かった。また、大勢で演奏しても自分の音が聞こえた嬉しさを語る子もいた。子どもにとっての存在感の重要性がわかる。「心を合わせる」は、合奏の重要な狙いであったが、〈質問5〉では「音を聴く」「みんなを」を意識していたことが分かる。また、「したくなる」「やろうと思う」など自らの意欲によることも感じている。

## 7. おわりに

本稿では、5歳児のクリスマスでの実践を通して、幼児の礼拝における賛美としての合奏に関して考察を行ってきた。三園の園児70名の合奏で、合同の機会を十分に設定できないという制約を抱えての実践であったが、その制約がかえって功を奏したといえる。練習回数よりも、子どもの心情面を重視した展開を行うことができた。実践経過の考察から、本稿2で述べた指導の要点全てが展開されていたことが確認できた。子どもの声からは、音を聴くことや心を合わせることを意識し、みんなと演奏する喜びや音の豊かさを感じ、「おいでなさい イエスさまよ」を演奏して「嬉しかった」こと等が聞かれ、どの子も充実感と達成感を持つことができた。礼拝における賛美としての合奏では、表現する子どもの内面を大切にして、音楽的な要素を感情経験や聴覚経験として扱い、イメージを重視した表現の展開が有効であり、子どもたちは心を込めて演奏することができた。

担当保育者も、クリスマスの合奏を通して、いろいろな思いをもったようである。<sup>20)</sup>今回、三つの園の子どもたちと関わり、子どもたちの考え方やものの捉え方に、保育者の視点が大きく影響していることを感じた。今後も子どもへのアプローチについての研究を行っていきたいと考えている。

## 【注】

- 1) 吉田若葉「幼児期の音楽教育のあり方に関する一考察」『北陸学院短期大学紀要』第15号 p.149-173  
昭和59年
- 2) 吉田若葉「保育における楽器指導—創造的な人間形成と音楽教育」『北陸学院短期大学紀要』第20号 p.177-196 昭和63年
- 3) ジェームス・マーセル著 美田節子訳『音楽的成長のための教育』音楽之友社 昭和46年
- 4) 木岡英三郎編『オルガン曲集 第一巻』基督教音楽出版 p.12 昭和24年初版
- 5) 飯靖子・志村拓生編『讃美歌21による 礼拝用オルガン曲集 第4巻 礼拝の時と教会暦1』  
日本基督教団出版局 p.38-39 1999年
- 6) 『讃美歌第二編』日本基督教団出版局 112 1984年
- 7) 『讃美歌21』日本基督教団出版局 p.394-395 1997年
- 8) 『改訂版こどもさんびか』日本キリスト教団出版局 p.84 2003年
- 9) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21略解』日本基督教団出版局 p.160 1998年
- 10) 飯靖子・志村拓生編『讃美歌21による 礼拝用オルガン曲集 第4巻 礼拝の時と教会暦1』  
日本基督教団出版局 p.82 1999年
- 11) 『讃美歌21』日本基督教団出版局 p.xii 1997年
- 12) 日本基督教団教育委員会編『こどもさんびか歌い方教え方』日本基督教団出版局 p.6 1969年
- 13) 日本基督教団讃美歌委員会編『讃美歌21略解』日本基督教団出版局 p.160 1998年
- 14) 北村宗次『教会の音楽』日本基督教団出版局 p.77 1979年
- 15) 北村宗次『教会の音楽』日本基督教団出版局 p.79-80 1979年
- 16) 北村宗次『教会の音楽』日本基督教団出版局 p.81 1979年



## 幼児の礼拝における賛美としての合奏に関する実践報告

- 17) 北村宗次『教会の音楽』日本基督教団出版局 p.83-84 1979年
- 18) 文/森一弘 絵/太田大八『ほんとうのクリスマス』女子パウロ会 2006年
- 19) 文/森一弘 絵/太田大八『ほんとうのクリスマス』女子パウロ会 最終ページ 2006年
- 20) **保育者 K** 最初に絵本『ほんとうのクリスマス』を読んだから、「おいでなさい イエスさまよ」の賛美歌を歌って聴かせた。

歌う時、歌詞が子どもの心にストンと入るイメージをもって意識して歌った。2回目は子どもと一緒に歌ったが、すぐに歌いはじめた姿に驚いた。絵本との繋がりが効果的だったと思う。保育者の意識が子どもの反応に影響することを実感した。

合奏は、子どもたちが、毎回楽しみにしていた。どの楽器も手ごたえのあるものだったと思う。ツーと子ども同士をつなげ「心を合わせる」という言葉を使ってから、子ども自身が意識し始めて「心をつなげる」「心を合わせる」という言葉を使うようになった。その頃から、ピアノの伴奏で、子どもの音と合わさっている感じを持てるようになった。また、ピアノ伴奏を、みんなが目を閉じて演奏してみた時から、耳を頼りに弾くようになった。どんなイメージで、何を意識して、体のどこに意識をおいて、自分と他との兼ね合いを合わせて行けば良いのかを今回学んだように思う。また、表現には、自分がしたいようにする表現と、他の人に伝える表現があることを確認した。

**保育者 D** 今まで、どんなことにも緊張しがちであった子やプレッシャーを感じると泣いていた子が、今回の合奏とページェントでは、本当に生き生きと参加している姿がみられた。他の子どもたちも自信がついたように思う。

子どもたちの演奏の仕方に変化が見られたのは、目を閉じて、他の楽器の音を聴きながら演奏する経験をしてからである。その後は、心を合わせようとするようになったと思う。

**保育者 M** 一緒に合わせての練習は数えるほどしかしていないのに、楽器の音がきれいに合わさった瞬間は言葉では言い表せない感動だった。合奏を通して、子どもたちは、息を合わせ思いをひとつにすることができた。子どもたちに、「おいでなさいイエスさまよ」のメロディーがしっかり入っていたから出来たのかもしれない。子どもが持っている力や感性はすばらしく、無限の可能性を秘めていることに気づくことができた。